語り継ぐ責任

桜浜中学校　代表者

八月五日、広島に到着し、広島平和記念公園に行きました。最初に、慰霊碑を見学しました。慰霊碑に刻まれた「安らかに眠ってください　過ちは繰返しませぬから」という文字や慰霊碑の前に置かれたたくさんの献花を見て、八十年前の広島でたくさんの尊い命が奪われたのだと実感しました。

次に原爆の子の像に千羽鶴を献納しました。ガラスケースから今にも溢れそうな千羽鶴を見て、人々の想いの強さが感じられました。そして、今も原爆の後遺症による白血病に苦しむ人々がいるということを絶対に忘れてはいけないと思いました。

そして、被爆者による証言講話を聴きました。そこで一番衝撃を受けたことは被爆者への差別です。当時の人々は、「放射線が遺伝するのではないか。感染するのではないか」と考え、被爆者を差別するようになりました。その影響で今回証言してくださった田中　聰司さんは、寮のお風呂を使うことができませんでした。原爆により苦しんだ人が、周囲の人々によってさらに苦しむことになったという痛ましい事実は心に深く残りました。また、今回の講話で、現在、核兵器の問題が多くあることを知りました。今、日本で戦争が起きていないからといって関心を持たないのではなく、国際問題に目を向けることが大切であると気づきました。

一日目の最後に、平和記念資料館を見学しました。そこには、広島の原爆に関する写真や遺品が展示されていました。そこに展示された思わず目を瞑ってしまうような痛々しい写真は、きっと当時の情景のほんの一部分です。私たちはこの過去から目を背けず、平和を世界に訴え続けなくてはならないと強く思いました。

八月六日、広島平和記念式典に参加しました。式典の言葉は一つ一つに深い意味があり、考えさせられました。世界中の人が集まり、平和への思いが強くなったと感じました。式典に参加をし、核兵器の廃絶と世界恒久平和の実現を訴える平和宣言を聴き、私たちが行動をしていく必要があると気づきました。

最後に、広島国際会議場で開催された全国こども平和サミットに参加しました。ここでは、被爆体験講話がとても印象に残っています。原爆投下時の情景が詳しく語られ、鳥肌が立ちました。このような悲劇を二度と繰り返さないよう、少しでも自分ができることをしていきたいです。そのために、核兵器や世界の現状などに関する知識を身に付けようと思います。

広島は八十年前に原爆が投下されたとは思えないほど美しい都市でした。そこには、「原爆に負けるまい」といった人々の想いや努力が表れていると感じました。だからこそ、その思いを私たちピースメッセンジャーが引き継ぎ、平和のために尽力していきたいです。今回、見て聴いて自分が感じたことを周りに責任を持って語り継いでいきたいです。

語り継ぐ大切さ

桜浜中学校　　代表者

広島に到着した時、初めに感じたことは、今の広島は戦争当時のおもかげはなく、とても栄えている町だということです。八十年前にこの場所で原爆が投下され、たくさんの人が苦しんだと感じられない光景でした。

初めに、「鶴を千羽折ると願い事が叶う」という言い伝えを信じ、鶴を折った佐々木禎子さんをモデルにした原爆の子の像に行き、千羽鶴を献納しました。どのガラスケースにも千羽鶴が多く献納されており、そのくらいたくさんの人の平和への想いが詰まっているのだと感じました。佐々木禎子さんは十二歳という若さで原爆の後遺症による白血病により亡くなりました。将来への希望がたくさんあったはずなのに、早くに命を失ってしまったのだと知り、とても悲しくなりました。戦争によって亡くなってしまった人々の思いを引き継ぎ、今、私ができる勉強やスポーツを少しでも頑張っていこうと思いました。

また、私たちは二人の被爆者の方のお話を聴きました。被爆した時の様子や、聴いた話を詳しく話してくださいました。被爆者にしか感じることができない、被爆した時の気持ちやその時の情景なども聴かせてもらいました。その話を想像してみるとさらに恐ろしさが増していきました。そして、二人が共通して話されていたことは未来のことです。「二度と八十年前のような悲惨で無残な出来事を起こさないでほしい。被爆者と同じ経験をしてほしくない」と話されました。その話を聴き、被爆者の願いに応えられるように自分ができることを努力しようと思いました。

今年の平和記念式典では、諸外国は「招待」ではなく「通知」の形式に変わりました。式典の趣旨を理解し、参列の申し込みが必要なかなか、過去最多の国や地域が式典に参加しました。そのことを知り、たくさんの国や地域の人々が広島のことを思っていて、広島が世界平和のために貢献しているのだと思いました。しかし、参加していない国や地域もあります。理由は様々あると思いますが、すべての国や地域が参加をし、広島で起こったことや核兵器の恐ろしさを知ってほしいです。また、「世界平和を目指す」と言葉ではどれだけでも言うことはできますが、行動に移すことは難しく、今も戦争は起きています。「核兵器禁止条約」が作られても、核兵器を所有している国は九か国もあります。このような世界では平和はおとずれないと思うので、今回学んだことをもとに自分で積極的に調べ、たくさんのことを知りたいと思いました。そうすることが今の私にできる行動だと思います。そして、二度と広島のような悲劇を起こさないために、周りの人に自分の知識や経験を伝えるとともに後世にも語り継ぎ、本当の意味での「平和」を実現できるような世界にしていきたいと思います。

核兵器廃絶に向けて

五十鈴中学校　代表者

私は今回の広島訪問で、様々な人たちの戦争や平和への思いを聴き、自分の考えをより深めることができました。私が印象に残っていることは三つあります。

一つめは、平和記念資料館での見学です。平和記念資料館には多くの人がいました。外国からの方もたくさんいました。展示室には原爆が落とされる前の風景が飾られていました。その風景があまりにも平穏な日常であったため、原爆でいつもの日常が一瞬で壊されたことがより一層伝わってきました。けがをされた方、被爆された方の形がゆがんだ持ち物、火の海となった広島、それらを見て私は震えが止まらず涙が出てしまいました。モノクロの写真でも伝わるけがの痛々しさ、家族の悲痛な思いが伝わってきました。原爆はとても恐ろしいものであり、もう二度と使用してはいけないと強く思いました。

二つめは被爆証言講話の田中　聰司さんのお話です。原爆の後遺症で長年苦しんでいる話は私も聴いていて苦しくなりました。核兵器の恐ろしさに加えて、核の保有国を減らしていくこと、自分のやるべきことを考え行動することなどを教えていただきました。なんとなく大丈夫だと考えていた自分の考えの甘さを認識するとともに、危機感をもつようになりました。

三つめは核抑止論への反対についてです。平和記念式典の中で、広島市松井市長が「世界中で軍備増強の動きが加速している」と話されていました。また『「自国を守るためには、核兵器の保有もやむを得ない」という考えが強まりつつある』と話をされていました。しかし、それでは世界の平和がつくられないことは私にも分かります。もし核戦争になったら世界が滅びてしまいます。そうならないためにも、核兵器廃絶へ進むべきであるという考え方に強く共感しました。この問題についてみんなで深く考え、発信していきたいです。

原爆の被害は街を破壊するだけではありません。その後の心の傷や白血病などの後遺症に苦しんでいる人も大勢います。この二日間で田中さんの話などを通じて、改めて原爆の恐ろしさを再認識しました。私もピースメッセンジャーとして家族や友だちに今回広島で学んできたことを伝えたいです。そして私たちだからこそできることを考えて行動していきたいです。

ヒロシマの悲劇から

五十鈴中学校　代表者

私は広島に行った二日間でたくさんの経験をさせていただきました。たった一つの原子爆弾で壊滅的な被害を受けた「ヒロシマ」の被爆の様子を見て、原子爆弾の本当の恐ろしさを感じました。そして戦争を二度としてはならないと改めて強く実感しました。今の核兵器はさらに脅威的になり、「一撃で地球上のすべての人間を殺せるようになった」と被爆証言講話で聴きました。このことを聴いて今すぐに地球上の人々全員で協力して核を廃絶していかなければいけないと強く思いました。

広島に行って私が特に心に残ったことが三つあります。

一つめは広島平和記念資料館の見学です。原子爆弾が落ちて被害を受けた実際の写真を初めて見ました。思わず目を覆いたくなるほどの、苦しくなってくる写真が展示されていました。悲惨な写真を一つ一つ目に焼き付けましたが、火傷や怪我の写真はとても生々しく、心が締めつけられました。広島の街が一瞬で焼け野原になった様子や、人間の体とは思えないほどに姿を変えた遺体の写真を見て、核の威力を改めて感じました。

二つめは原爆ドームの見学です。原爆ドームは写真やニュースで見たことがありましたが、実際に見ると原爆の怖さが一層伝わってきました。鉄骨が剥き出しで天井も崩れていて、あのようなひどい状態の建物を初めて見ました。八月六日の悲劇を直接語りかけていると感じました。

三つめは被爆証言講話です。田中 聡司さんは、「終末時計では人類滅亡まであと八十九秒しかない」と伝えられました。私はまだ幸せに生きていたいです。人類を滅亡させないために、日本だけでなく世界中のみんなが核兵器の怖さを詳しく知り、全世界で危機感を共有しないと、人類滅亡の時が来てしまうと思いました。

広島を訪れたことで、幸せな日常のありがたさを感じます。原爆投下時の八月六日の広島の人々も、原子爆弾により日常が壊れるとは思いもしなかっただろうと思うと胸が痛くなります。まだ未来のある幼い子どもたちや学生の命を、何の関係もなく無差別に奪った戦争に憤りをもちました。だからこそ平和記念公園内にある石碑の通り、もう二度と繰り返さないことが唯一の被爆国である日本の使命だと思います。私もピースメッセンジャーとして、ソーシャルネットサービスなどを使って世界中に核兵器廃絶について発信していきたいです。一人の行動だけでは効果は薄いかもしれませんが、多くの人に伝わればきっと大きな力になると思います。そして平和な世の中をみんなと一緒につくっていきたいです。

被爆者の思いを未来へつなぐ

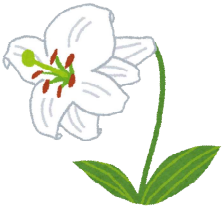
二見中学校　代表者

私は八月五日、六日の二日間、初めて広島を訪れ、多くのことを学びました。特に印象に残ったことが二つあります。

一つめは、広島平和記念資料館の見学です。資料館には、被爆された方々の遺品や写真、映像が展示されており、目にした瞬間から胸が締めつけられるようでした。穴だらけでボロボロになった衣服、焼け焦げた三輪車、黒く変色したお弁当箱など、どれもそこに生きていた人々の命や日常を強く感じさせるものでした。また、原爆の強烈な熱線によって亡くなられた方が腰掛けていた階段には、人影の跡が黒く焼き付いていました。光と影が生み出した「人影の石」を目の当たりにし、原爆の威力と戦争の悲惨さを痛感しました。さらに、展示の一つ一つからは、当時の人々の苦しみや悲しみが強く伝わってきて、平和の尊さを深く考えさせられました。平和記念資料館は、単に原爆の被害を伝える場所ではなく、私たちが平和について深く考え、行動するきっかけを与えてくれる場所だと感じました。

二つめは、被爆証言講話です。田中　聰司さんは、ご自身が被爆したことで差別を受け、五十歳になるまで被爆者であることを認めたくなかったと語られていました。田中さんが差別の苦しみを語られたとき、戦争は、命を奪うだけでなく、人の心や人生までも深く傷つけてしまうものだと知りました。そして、核兵器は絶対になくさなければならないと改めて強く感じ、戦争という過ちを二度と繰り返してはならないと心に誓いました。また、核兵器の恐ろしさを被爆証言講話で聴いて、決して存在してはならないものだと学びました。さらに田中さんは「命を大切にすること」の重要性を語られ、私は心から共感しました。田中さんのお話を通して、同じような体験を他の人に決してさせてはならないと強く心に刻みました。今後、私は自分にできることを考え、行動していく人間になりたいと思います。なぜなら、それが自分自身や周囲の人々の幸せにつながると信じているからです。

現在、被爆者の平均年齢は八十六歳を超え、直接お話を伺う機会は年々少なくなっています。「被爆者なき時代」が迫る中で、次世代への継承が大きな課題です。私はピースメッセンジャーとして、今回の二日間の体験を通して知った事実を語り継ぎ、次の世代へ平和の大切さを伝えていくことが、私たちに課せられた大切な役割だと強く感じました。そして、その小さな一歩の積み重ねこそが、戦争や核兵器のない未来を創る力になると信じています。私は、平和な社会を築く一員となれるよう、広島で学んだことを忘れず、自分の言葉で語り続けたいです。



核兵器の恐ろしさ

二見中学校　代表者

私は広島で特に印象に残った事が三つあります。

一つめは、当時から残っている原爆ドームを見学したことです。写真では見たことがありましたが、実際に目にすると非常に大きな衝撃を受けました。建物のほとんどが崩れ落ちていて、これが核兵器によって破壊されたという事実に、核の恐ろしさを肌で感じ、とても怖くなりました。同時に、核兵器の惨禍を伝える原爆ドームを、未来へ永く残していかなければならないと強く思いました。

二つめは被爆者の方のお話を聴いたことです。普段通りの日常が、原爆投下によって一瞬で焼け野原になり、多くの命が失われたというお話でした。なかでも特に驚いたのは、被爆者の方々が差別を受けていたという事実です。私が直接お話を伺った田中さんも、被爆者というだけで周囲から避けられ、その事実を誰にも話せずにいたそうです。いまだに被爆者健康手帳を受け取っていない方もいると聴きました。当たり前だと思っていた日常が原爆によって消えるだけでなく、被爆者の方々がどれほど心にも深い傷を負っているのかと思うと、胸が苦しくなりました。被爆された方々が少なくなる今、私たちがこの貴重なお話から感じたことを、次の世代に伝えていかなければならないと改めて実感しました。

三つめは広島平和記念資料館です。多くの遺品が展示される中で、特に印象に残っているのは、人間とは思えないほど皮膚が焼けただれた被爆者の写真や、その当時から残るボロボロになった衣服でした。資料館のあまりの悲惨さに心が痛み、自然と涙がこぼれました。「死にたくない」と必死に叫ぶ人々の情景が、資料から痛いほど伝わってきました。資料館を見学して、頭では分かっていたつもりでも、この日本で本当に戦争があったのだという事実を突きつけられました。この胸の痛みは今でも深く心に刻まれています。

私たちは平和への願いを込めて、学校の仲間たちと作った千羽鶴を献納しました。この世界が平和であり、このような過ちが二度と起こらないようにと、強く願いながら折った千羽鶴です。

広島で起きた、「怖い」「悲惨」という簡単な言葉では言い表せないほど残酷な出来事を、私たちは決して忘れてはいけません。平和な世界を築いていくために、この経験を「ピースメッセンジャー」として次の世代や周りの人々に伝えていくことが、私たちの使命だと感じています。そして、平和や戦争について深く考え、命の尊さを理解し、核兵器廃絶を世界に訴えていきたいです。

私たちがつくる平和

小俣中学校　代表者

私は今回の平和記念式典に参加するにあたり、初めて広島を訪れました。広島に着いたとき、八十年前、ここに原子爆弾が投下されたことなど想像もできないほど平穏な雰囲気を感じました。しかし、訪問した二日間で、その平穏な日常とかけ離れた、原子爆弾による恐ろしい出来事について学ぶことができました。

広島平和記念公園にある原爆の子の像に各校の全校生徒が作った千羽鶴を献納し、一日目の最後に広島平和記念資料館に行きました。そこには、原子爆弾によって痛々しいけがをしている人々の写真がありました。皮膚が熱風によって溶かされて固まり、目も開かなくなっている人、全身に大やけどを負って皮膚が黒くなり、人間の姿とは思えないような状態の人など、私の想像を絶するようなものばかりでした。当時の様子を描いた絵は、まさに地獄そのものが描かれていて、どれも目を逸らしたくなるものばかりでした。私は、このような事実があったことを信じられませんし、信じたくありません。しかし、これが現実であることと、たった一つの原子爆弾で、一瞬にしてたくさんの人の命が奪われたということに、恐ろしさを覚えました。しかし、その時、被爆証言講話をしてくださった田中　聡司さんの言葉を思い出しました。「今、何をしなければいけないのか、自分に何ができるのかをまずは考えてほしい。このことを忘れないでほしい」私は、資料館で見た原爆被害の実相や、核兵器の恐ろしさと戦争の悲惨さを伝えてくださった田中さんの言葉を、多くの人に伝えなければならないと強く心に思いました。このような惨劇を二度と起こさないために、今を生きている私たちが行動しなければならないと思いました。

この二日間の経験は、私が今まで思っていた「平和の大切さ」を確実なものにし、私たちが何をすべきかを教えてくれました。戦争が、いかに家族や友人、地域の人たちとの平穏な日常を奪ってしまうものなのか、今ある平和を奪ってしまうものなのか、伝えていかなければならないと思います。また、一瞬にして多くの人の命を奪ってしまう核兵器についても、廃絶について考えて行動する必要があると思いました。そして、その「するべきこと」を一つ一つ実行していくことが、私たちにできる平和への第一歩だと思います。

戦後八十年の広島を訪れて

小俣中学校　代表者

私は今年、中学生ピースメッセンジャーとして、広島で行われた平和記念式典に初めて参列しました。この式典は、一九四五年八月六日に広島に原子爆弾が投下されて多くの命が失われたことを忘れず、平和の尊さを考えるための大切な式典です。今回の経験は、私にとって二度と忘れることができないものになりました。その中でも印象に残ったことが四つあります。

一つめは、被爆証言講話です。被爆者の田中　聰司さんから実際に起きたことを聴きました。田中さんの言葉の一つ一つが胸に刺さり、当時の悲惨な状況や被爆後も続く苦しみを想像すると言葉を失いました。「生きているところまで生きてこられた。だから先人の思いを語り継いでいこうと決めた」という言葉に、様々な経験を必死に乗り越えてきた田中さんの覚悟を感じました。そして、争いが起きて核兵器が使用されると一瞬にして多くの人の命がなくなってしまう過去の経験から、核兵器のない世界を必ず実現しなけらばならないという思いが伝わってきました。

二つめは、原爆の子の像に千羽鶴を献納したことです。折り鶴は平和の象徴として知られています。そこに捧げられた千羽鶴は数えきれない程ありました。献納された千羽鶴を見て、自分の思っている以上の人々が訪れていることに驚きました。私も学校で作成した千羽鶴を犠牲者の方々への祈りを込めて捧げました。

三つめは、平和記念資料館の見学です。展示されている一つ一つから言葉では表せないくらいの衝撃を受けました。思い浮かぶ言葉は、「恐ろしい」ということだけです。一瞬にして町を破壊してしまう原爆を二度と使用してはいけないと強く思いました。

四つめは、平和記念式典です。朝早くから被爆者や遺族の方々をはじめ、国内外から多くの人々が集まり、緊張感のある雰囲気に包まれていました。八時十五分、八十年前に原子爆弾が投下され、一瞬にして町が崩壊されたこの時間、会場中が静まり返り、多くの人が犠牲者の方々のことを思いながら黙祷を捧げていました。今回の平和記念式典への参列で、私は歴史の勉強以外に学んだことがあります。それは「平和とは何か」を自分自身で考え、行動に移すためのきっかけとなったことです。日常生活を送るということがどれほど尊いのか、平和を守る責任を強く感じました。その一歩として、広島で学んだことを周りの人に伝えていくことが、今、私にできることだと思っています。

今、紛争や核兵器の問題は決して過去の話ではありません。広島の悲劇を繰り返さないために、一人ひとりが平和について真剣に考え、声をあげていくことが必要です。私は今回の経験をもとに、平和な世界を実現するために、ピースメッセンジャーとして語り継いでいきたいです。

広島で学んだことをこれからに

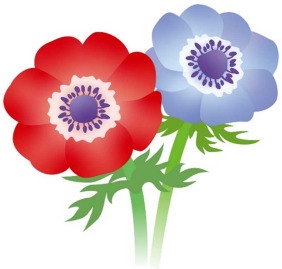
御薗中学校　代表者

八月五日、私は御薗中学校の代表として広島を訪れました。広島に行くのは初めてで、平和記念資料館の見学や平和記念式典への参加、被爆証言講話を聴くなど、貴重な体験を通して多くのことを学ぶことができました。

なかでも特に心に残っているのは、田中 聰司さんの被爆証言講話です。田中さんは一歳五か月の時に被爆され、その後、被爆者であることで差別を受けた経験から、長い間自分が被爆者であることを隠して生きてこられました。偏見で被爆者が差別を受けるという理不尽さに、胸が痛みました。やがて田中さんは新聞記者となり、日本被団協を取材する中で、核兵器廃絶や被爆者の救済に尽力する人々の姿に心を打たれ、被爆者としての立場を隠すのではなく、自らも日本被団協の一員として活動していくことを決意されました。私はその話を聴き、悲劇を繰り返さないために行動された田中さんの姿に、強い尊敬の念を抱きました。そして、「二度と核兵器の使用が繰り返されないために、それぞれの立場で何ができるかを考えられる人間になってほしい」という田中さんの言葉が、私の心に深く刻まれました。その言葉は、行動を起こして、私たちに今ある状況を少しでも変えていってほしいという意味だと思いました。だからこそ私は、これからピースメッセンジャーとして、原爆の威力や被爆者の方々の思いを伝えていきたいです。

また、一日目に見学した平和記念資料館では大きな衝撃を受けました。そこには被爆者の遺品や写真、絵などが展示されていました。それらからは、原子爆弾の投下による惨状が生々しく伝わりました。特に子どもの写真に添えられた言葉からは、原爆の残酷さや悲惨さが強く伝わり、胸が締めつけられる思いがしました。資料館で見たことは、決して忘れません。

私は、二日間広島で実際に自分の目で見て、耳で聴き、体験したことで、原爆の恐ろしさや平和の尊さを強く感じました。また、私たちは平和を願うだけではなく、一人ひとりが自分にできることを考え、それを行動に移すことが大切だと思います。私は、この感じたことを、平和な世界をつくるために次世代へと伝えていきたいです。まずは周りの人に原爆の恐ろしさや平和の尊さを伝え、これからも世界平和を訴え続けていきます。



広島での二日間

御薗中学校　代表者

私は広島での二日間で原子爆弾の恐ろしさ、被害、被爆者の思い、戦後の取り組みについて学びました。

今まで被爆体験について実際に話を聴いたことがなかったので、被爆証言講話は特に印象に残りました。講話をしてくださった田中聰司さんは原爆投下時は一歳五ヶ月でした。当時は、軍による救護や食物等の支給が十分でなく、田中さんや周りの子どもは靴磨きをしてお金を稼いだり、川を泳ぐ魚をとったりして生活をしていたそうです。約十四万人の人が亡くなったと聴きましたが、その後も後遺症や栄養失調で亡くなった人も多いと言っていました。私が今このように生活できていることは、とても恵まれていると思いました。

平和記念資料館では被爆者たちの言葉がたくさん残されていました。当時の状況が事細かく示されていて恐怖を感じました。親戚の遺体を見た時のことを書いた手記や黒い雨について書いた展示、川でたくさんの人が野垂れ死んでいる様子を書いた資料がありました。文章以外にも、言葉では言い尽くすことのできない強烈な絵や写真で戦争の悲惨さがよくわかりました。もし、今、開発している核兵器を使うと当時よりも大きな被害となります。私は、絶対に今後、核兵器を無くす必要があると思いました。

今年は戦後八十年という節目を迎えました。広島平和記念式典には、内閣総理大臣をはじめ世界各国からもたくさんの人が参加していました。広島市長の平和宣言では、自分より他の人の立場を重視する考え方を優先することが大切であること、「平和文化」が、国境を超えて広がっていけば核抑止力に依存する為政者の政策転換を促すことになるといった内容が述べられました。

世界には、核兵器を持っている国があります。そういった国々のニュースにこれからも注目しながら、被爆者たちの死を無駄にしないためにも、核兵器の悲惨さを、自分たちのような戦争をほとんど知らない世代が、一人でも多く周りの人に伝えて、平和について考えて行動しないといけないと思いました。

二日間を通して、今までにない大きな経験をしました。このような経験をさせてくださった方々に感謝をし、この経験からの学びをピースメッセンジャーとして多くの人に伝えていきます。

今まで知らなかった戦争の真実

倉田山中学校　代表者

私は八月五・六日の二日間、学校の代表として広島を訪れ、平和記念式典に参列しました。初めての広島訪問で少し緊張していましたが、同じ学校の友だちや他校の子たちと行動を共にすることで、仲間がいる安心感がありました。また、「平和や戦争のことについてしっかり学びたい」という気持ちが強まりました。

現地に着いてから、原爆の子の像に行き、千羽鶴の献納を行いました。平和への願いが込められた色とりどりの折り鶴がケースから溢れるほど献納されていました。その中に、私たちの折り鶴も加わることで、少しでも核兵器廃絶と世界恒久平和を願う輪が広がってほしいと思いました。次に、原爆ドームを見学しました。写真では何度も見たことのある建物でしたが、実際に目の前で見ると、その迫力に圧倒され、胸が締めつけられるような思いになりました。壊れたままの姿で今も残されているその建物は、原爆が人々にもたらした悲しみや苦しみを静かに語っているようでした。その後、被爆証言講話を聴きました。講話をしてくださった田中さんは、原爆が落とされた当時、まだ一歳五か月だったそうです。自分の記憶には残っていなくても、ご家族や周囲の方々から聴いた体験、そして成長する中で見てきた被爆者の現実について語られました。身近な家族を失ったこと、日常が一瞬で奪われたこと、そして生き延びた人々がその後どれほど苦しんできたのかを、静かに、しかし力強く話されました。その姿から、「語り継ぐ」ということの重みと大切さを学びました。

翌日の八月六日には、平和記念式典に参列しました。朝早くから多くの人が集まり、外国から参列される方もたくさんいました。黙祷を捧げ、静かに平和を願う時間を共有しました。私は、こども代表による「平和への誓い」の言葉が心に強く残っています。自分と同じ世代の代表二名が、はっきりとした言葉で平和の大切さを訴える姿に胸を打たれました。

この二日間を通して、私は「平和は当たり前ではない」ということを強く感じました。今の私たちが平和な毎日を過ごせているのは、過去の悲しみや苦しみを乗り越えようとしてきた人たちの思いがあったからです。私は、今回学んだことを家族や友だち、地域の方々に伝えていくことが、私たちピースメッセンジャーの使命だと思います。小さなことでも自分にできる平和のための行動を続けていきたいと思います。

広島から学んだ平和の大切さ

倉田山中学校　代表者

私は、倉田山中学校の代表として広島を訪れ、平和記念式典に参加する貴重な経験をしました。現地では、代表として気を引き締めて戦争や平和についての学習をしました。自分にとってたくさんの学びにつながり、平和の尊さや戦争の悲惨さについての意識が強くなり、とても有意義な経験になりました。

広島に到着し、平和記念公園に向かいました。公園内には、原爆ドームや慰霊碑など、戦争の痛みや平和への願いを象徴する場所が多くあります。初めに慰霊碑に行きました。慰霊碑には原爆で亡くなられた約十四万人の人々の名簿が収められています。その後、私たちは折り鶴を献納しました。折り鶴には、戦争で犠牲になった全ての人々への祈りと、平和を願う気持ちを込めて一羽一羽全校生徒で大切に折りました。倉田山中学校の全員の想いと共に大切に献納してきました。原爆ドームの周辺は、整備されて新しい建物があるのに、この一箇所だけ異様な感じで威圧感がありました。ここだけ時間が止まっているような光景で原爆の威力と恐ろしさを物語っていました。私はここで、戦争の悲劇が繰り返されないように、平和を守る責任が私たち一人ひとりにあることを強く実感しました。次に被爆証言講話を聴くためにレストハウスに行き、田中　聰司さんのお話を聴くことができました。田中さんは、広島での被爆体験を詳しく語り、当時の恐怖や絶望を私たちに伝えてくださいました。特に心に残ったのは、田中さんが「戦争の悲劇を二度と繰り返してはならない」と語った言葉です。戦争を知らない世代として、その言葉が胸に響きました。私は、この貴重な被爆証言を通して、平和を守るために何ができるのかを真剣に考えることができました。その後は平和記念資料館に行き、戦争当時の展示や遺品を見ました。特に火傷を負っている人たちの絵や写真がとても凄惨で、言葉を失いました。

二日目には平和記念式典に参列しました。式典には世界各国から多くの参列者が集まり、犠牲者への黙祷や平和の誓いが行われました。その中で、私自身も平和への願いを込めて、心を込めて黙祷を捧げました。特に心に残ったのはこども代表のスピーチです。私たちと同じ世代の二名の代表が、言葉に力を込めて「戦争を繰り返さないように、平和を守るために私たちは努力し続ける」と訴えました。その誠実な言葉が会場全体の人々の胸にしっかりと伝わっていると感じました。

広島での経験を通して、私は平和の大切さを改めて実感しました。戦争で失われた命を無駄にしないために、私たち一人ひとりが平和や戦争について後世に伝え続ける必要があると思いました。中学生代表として参加できたことに誇りを感じ、これからも平和への活動に貢献できるよう努めていきたいと思います。

平和を願う気持ち

厚生中学校　代表者

私は厚生中学校の代表として、原爆が投下された広島市を訪問し、八月六日に行われた平和記念式典に参列しました。これまで教科書やテレビでしか知らなかった広島の歴史や平和への思いを自分の肌で感じることができ、心に深く残る二日間になりました。

一日目はまず、広島平和公園内の慰霊碑に行きました。たくさんの名前が刻まれていて、原爆で亡くなった一人ひとりにかけがえのない人生があったのだと思い、胸が苦しくなりました。そのあと、原爆の子の像へ行き、全校生徒で折った千羽鶴を献納しました。

次に、原爆ドームを目の前にしたとき、私は衝撃を受けました。教科書や写真で見てはいましたが、実際にその場に立つと言葉が出なくなってしまいました。爆風に耐えて骨組みだけが残っている姿は、まるで時が止まっているようでした。広島の人たちがこの建物を残すことを選んだのは、平和を願い続けるための強い気持ちがあるからなのだと、そのあとの田中　聰司さんの講話を聴いてわかりました。田中さんが話してくださった内容は、想像をはるかに超えるつらいものでした。絶望的な状況でも生きようとした人たちの強さ。そのお話を聴いて胸が痛くなりました。私たちが今当たり前に過ごしている平和な世の中は、たくさんの人が苦しみの中、平和に向けて力を尽くした上にあるのだと絶対に忘れてはいけないと思いました。

最後に訪れた平和記念資料館では、原爆がどれだけひどいものだったかを展示物から知りました。焦げた服やお弁当箱、当時の様子を伝える生々しい写真。どれもこれも戦争の恐ろしさを教えてくれました。

二日目は、平和記念式典に参加しました。朝早くからたくさんの人が集まっていて、静かに平和を祈る姿はとても厳かで心打たれる光景でした。平和記念公園の鐘の音と黙祷、世界中の人がこの場所から平和を願っているのだという一体感を肌で感じることができました。そのあとの青少年平和文化イベントでは、被爆者の方が語ったり、高校生の方たちが平和の尊さを歌で表現したりしていて、とても感動しました。平和は誰かがくれるものではなく、私たち一人ひとりが考えて行動することでつくられていくのだと改めて気付かされました。

私はこの広島での経験を通して、平和を願う気持ちを心の中で持つに留まらず、言葉や行動で次の世代に伝えていくことが私たちの役目なのだと強く感じました。戦争の記憶がだんだん薄れている今、この貴重な経験を胸にこれからも平和について考え、学び続けていきたいと思います。そして、私がこの思いを次の世代に伝えられるように、毎日を大切に生きていきたいです。

今回の広島での経験は、私の人生にとってとても大きな一歩になりました。

広島を訪れて

厚生中学校　代表者

八月五日・六日の二日間、私は広島を訪れ、広島で何があったのかを学びました。

まず、平和記念公園に向かい、原爆死没者慰霊碑を見学しました。この慰霊碑には「安らかに眠って下さい 過ちは繰返しませぬから」と刻まれていて、このような悲劇をもう起こしてはいけないという思いが強く感じられました。そして、原爆の子の像に千羽鶴の献納に行きました。多くの折り鶴が献納されており、多くの方の平和への願いがありました。そこに私たちの平和への思いが加わったことを嬉しく思います。次に、原爆ドームを見学しました。原爆ドームは原爆により破壊され、建物が崩れそうなほどボロボロになっていました。

その後、田中 聰司さんの被爆証言講話を聴きました。戦争当時どう過ごしてきたかを詳しく説明されました。田中さんは最初、「戦争のことを話すことは苦しく、いやだった」と話していました。しかし、戦争について人々に知ってもらうために話すことを決めたそうです。僕たちが今当たり前に過ごせているのは、田中さんたちのような人たちのおかげでもあるのかなと思いました。

二日目はいよいよ平和記念式典に参列しました。平和記念式典ではこども代表の関口さんと佐々木さんが言葉を述べていました。「二度とこの悲劇を起こしてはいけない。被爆者の声をを語り継いでいく」ということを伝えていました。この言葉には平和への思いが込められていて、平和な世の中を作るためにこの悲劇を忘れてはいけないということが感じられました。今でもウクライナなど世界各国で戦争が起きています。だからこの日本の広島で起きたことを世界各国へ届け、世界平和を目指していきたいです。

この二日間で一番印象に残っていることは、平和記念資料館です。平和記念資料館には戦争当時の遺品、写真、衣服などが展示されていました。その中でも一番胸が痛くなったのは、「人影の石」です。これは、原爆の近距離被爆により亡くなってしまった方が腰かけていた部分が、あまりの熱線により影のように黒く残ったものです。これを見たとき、初めは何かわかりませんでした。人の形に塗ってあるペンキのような物かと思いました。すごく黒くはっきりと残っていました。過去の悲劇ではなく、こちらにまで痛ましい情景が浮かんでくる展示でした。他にも亡くなった方々の最期の言葉がありました。そこにはまだ幼い子どもの言葉もありました。お父さんに助けを求める声、「水が欲しい」と求める声、いろいろな人の叫びがありました。私たちピースメッセンジャーが戦争を知らない世代へ、このような事実を伝えてつないでいき、世界の平和を実現させていきたいです。

平和と共に歩む

伊勢宮川中学校　代表者

私は今回初めて広島を訪れました。戦争がどれだけ悲惨だったのかを身をもって感じました。テレビや学校でしか見たり聴いたりしたことがなかった私にとって、この経験は脳裏に焼き付けられ、一生忘れてはいけない貴重なものになりました。

八月六日に行われた平和記念式典では、会場を埋め尽くすほどの人が参列していて圧倒されました。外国の方も多く、世界の様々な人が平和を願っているのだと実感することができました。

式典が行われた平和記念公園内には、多くの建物がありました。原爆ドームは、実際に見ると迫力があって、広島の原爆で亡くなった人たちの声が聞こえたような気がしました。原爆の子の像には、全校生徒で作った千羽鶴を献納し、戦争で亡くなったすべての人に、生徒一人ひとりが持っている平和への思いを届けました。

そして、広島平和記念資料館には、原爆が落とされた時代の痛々しい写真や絵が展示されていました。原爆の子の像のモデルになった佐々木禎子さんが実際に折った折り鶴を見たことが記憶に残っています。佐々木禎子さんは一二歳の時に原爆が原因の白血病で亡くなりました。私たちと同じ世代の沢山の子どもたちが明るい未来を歩めなかったと考えると心が痛くなります。私は生きたくても生きることができなかった子どもたちの意思を次の世代へ繋いでいく重要な役割があるのだと自覚させられました。

私がこの二日間を通して特に印象に残っているのは、平和記念式典での放鳩の場面です。広島市長の平和宣言の後に、数羽の鳩が一斉に空へ羽ばたいていく姿が見えました。平和の象徴である鳩が世界各国へ平和の思いを届け、さらに未来へと伝えているように感じました。ピースメッセンジャーも、この鳩のように、平和の価値を届ける役割があるのだと思います。

世界にはまだ一万二千発以上の核兵器があり、広島に落とされた原爆よりさらに大きな威力を持つそうです。これを撃ち合えば一瞬で世界が破滅します。危険な戦争を避けるために、日本から世界へ平和の幸せや大切さを伝えていかなくてはいけません。私は、広島に行ってから現代の日本がいかに平和で幸せかを身に染みて感じるようになりました。美味しいご飯が食べられること、学校に行って勉強ができること、毎日普通の生活ができることに感謝し、ピースメッセンジャーとして、これからの日本と世界が平和と共に歩むことができるよう取り組み続けます。

あの日のヒロシマから考える

伊勢宮川中学校　代表者

この二日間、八月六日の広島に何があったのか、詳しく学ぶことができました。原爆の悲惨さについては、以前から学校の授業やテレビで勉強していました。しかし、実際にその場に行き、原爆で亡くなった方の遺品を見たり、式典に参加したりすることで、これまでには感じられなかった現実を深く心に刻むことができました。

まず、一日目に訪れた資料館では、被爆した方の遺品や言葉、原爆が投下された当時の広島の街の写真が展示されており、その一つ一つが、原爆がもたらした破壊と苦しみを物語っていました。中でも印象に残っているのは、資料館に入ってすぐの所に展示されていた焼け焦げた中学生や女学生たちの制服です。それらの衣服は所々黒く炭のようになって破れた状態でした。その形から、原爆の凄まじい熱風と熱線、そして若い命が一瞬にして奪われた惨状が伝わりました。資料館では、原爆が人の命だけでなく、当たり前にあった日常生活やこれからの未来まで、全てを奪ったということを強く学ぶことができました。そして、原爆による惨禍は過去の出来事ではなく、未来の平和に繋げるために、考え続けなければならないことだと思いました。

そして、翌日の平和記念式典では、午前八時十五分に打ち鳴らされた「平和の鐘」や広島市長の「平和宣言」から、平和には唯一無二の価値があると、肌で感じることができました。式典の中で最も印象に残っているのは、子ども代表の「平和への誓い」です。「たとえ一つの声でも、学んだ事実に思いを込めて伝えれば、変化をもたらすことができるはず」という言葉から、「どんなに小さな声でも無力ではない。学んだことから得た気づきや思いを伝えれば、平和への一歩を踏み出せるという思いが込められている」と感じました。そして、ピースメッセンジャーとして、広島で学んだ原爆の恐ろしさや唯一無二の平和の価値をしっかりと伝えたいと思いました。

広島に行って実際に感じた雰囲気、見た資料、聞いた言葉それらは全て、貴重なことだったと改めて感じます。だからこそ、今回学んだことを周りの人に伝え、一人でも多くの人が、平和について考えてもらえるようにします。未来の社会を背負う世代として、私たちは平和を祈るだけでなく、あの日広島に起こった事を過去の出来事と捉えず、学び考え行動し、次の世代に平和のバトンを繋げなければなりません。そして、それが平和への道になるはずです。

私たちができること

港中学校　代表者

私は八月五日と六日に広島に行きました。田中 聰司さんの証言講話がとても印象に残っています。田中さんは一歳五か月の時に被爆しました。当時の記憶はなく、主に被爆後の話を私たちに語られました。当時、日本は世界で初めての原子爆弾を投下され、世界から可哀想な国だと思われていたそうです。それを聴いて私は、今の日本とのギャップを感じました。今、私は不自由なく生活しています。毎日ご飯を食べることができます。しかし戦後の日本は深刻な食糧不足でした。ユニセフから無償で脱脂粉乳は供給されたそうですが、何日かに一食という生活を繰り返し、餓死する人もいたはずです。どのくらい今の生活が幸せなのかと実感しました。

最も印象に残ったのは、一九五七年から現在まで交付されている被爆者健康手帳についてです。今、生きている被爆者は約十万人と言われています。この十万人は手帳を持っている人数で、手帳を取得することで病院の診察代や治療費が無料になります。年々手帳を受け取ることが難しくなっていると聴きました。田中さんは五十歳になってから手帳を持ちました。四十年以上持たなかった理由はなぜでしょうか。手帳を取らなかった理由は、被爆したことでたくさんの人が差別を受けてきたのを見ていたからです。手帳を持つと被爆者であることを認めることになります。そのことに抵抗があったと話されていました。どれだけ差別がひどかったのか、被爆者と認めることをどれだけ恐れていたのか、この時、田中さんの穏やかな声が少し力強く感じました。

田中さんの話を聴き、もう二度と原子爆弾を使ってはならないということの理由を改めて考えられました。原子爆弾はたくさんの人を殺し、生き残った人を不安にさせ、苦しみを与えます。今、世界には九つの国が核兵器を所有しており、田中さんは「その国のリーダーを動かしたい」とおっしゃっていました。その大きな目標が胸に響きました。これからの世代のために行動するとはこういうことなのかと実感させられました。田中さんの目標のように大きなことではないけれど、私も原子爆弾について考え、伝えていきたいと思います。広島から帰った日、私は、家族に広島で学んだことを話しました。たくさんのことを深く考えることができ、とても充実した二日間でした。

広島に行って学んだこと

港中学校　代表者

私は二日間広島に行き、戦争の悲惨さや、原子爆弾で多くの方が亡くなり、心身ともに深い傷を負った人々の苦しさを学びました。戦争や原子爆弾などでそのような思いをする人や悲しむ人がこれ以上増えず、世界が平和になっていってほしいと思いました。

広島平和記念資料館の見学や被爆証言講話で広島に落とされたたった一発の原子爆弾で、一瞬にして広島の街が地獄のようになったという話を聴いたり、写真を見たりしました。想像していたよりもはるかな残酷さを学び、とても胸が苦しくなりました。

被爆証言講話の田中　聰司さんの話を聴いて特に印象に残っているのは、被爆者の方に対しての差別についてです。被爆された後も原子爆弾の後遺症だけでなく、周りからの差別でつらい思いをし、自分自身が被爆者であることを認められずに、長い間隠して生きていかなければならなかったと語られました。たった一発の原子爆弾が、後遺症や差別などの苦しみをたくさんの人にもたらしたことがわかりました。それらは、時間の経過だけでは薄まることはないものばかりです。たくさんの人の心までも苦しめる、原子爆弾の恐ろしさを痛切に感じました。

その場にいた全員が真剣な表情で話を聴いており、被爆者やピースメッセンジャーとしてのそれぞれの立場から平和を守っていきたいという強い想いを感じることができました。また、平和記念公園にあるたくさんの平和を願う慰霊碑や石碑、原爆ドームを見て、原子爆弾の悲惨さを改めて感じ、平和の尊さについて考えることができました。今、私たちが当たり前だと思っているこの平和な日常は当たり前ではなく、どれだけ大切なことなのかを実感することができました。

被爆者の方が少なくなっている中、原爆ドームの姿や平和記念資料館の提示物が、戦争や原子爆弾の悲惨さ、平和の尊さ、核兵器の廃絶を訴え続けてくれているのだと感じました。友だちや家族、周りの人にこの二日間で学んだことを伝えていき、被爆者の方の想いを次の世代へつなげたいです。

この二日間を通して、今の私にできることは何かと考えました。戦争が起こらないように、原子爆弾が二度と使われないように、次の世代へと学んだことや平和の尊さを伝えていき、原子爆弾で亡くなった方のためにも、平和について考え続け、行動に移すことが大切だと思います。

私たちがピースメッセンジャーとして広島で学んだことを語り継ぎ、一人でも多くの人が平和の大切さに気づき、行動することを願っています。

広島記念式典について

城田中学校　代表者

私は八月五日、六日と二日間、城田中学校の代表として、平和について学ぶために広島へ行きました。戦争の悲惨さを感じ、平和の大切さについて深く考える二日間でした。

一日目に、広島平和記念公園を訪れました。そこでは、全校生徒で折った千羽鶴を、原爆の子の像に献納しました。その後、原爆ドームを見学しました。テレビで見たことはありましたが、実際に目にすると、当時の様子がそのまま残っていて、とても残酷でした。次に、被爆者の田中さんのお話を聴きました。私たちが知らない当時に起きた悲惨なことやその様子などを詳しく話していただきました。戦争の悲惨さについてわかっていたつもりでしたが、実際に被爆者の方の話を聴いて、戦争は二度と起こしてはならないと強く思いました。次に、平和記念資料館へも行きました。そこでは、戦争当時の写真やイラストが展示されていました。特に印象に残ったのは、戦争当時に原子爆弾によって亡くなってしまった学生たちの衣服です。その衣服はボロボロで、血が付いており、原爆の被害がどれほど悲惨なのかが、よくわかりました。

二日目には、広島平和記念式典に参加しました。世界各国から多くの方が参列され、平和を願う人が日本だけではなく、多くの国の人たちも同じ気持ちを持っているのだと感じました。八時十五分に一分間黙祷し、世界から核兵器を無くして欲しいという思いで平和を祈りました。式典終了後、全国こども平和サミットに参加しました。最初に広島市立特別支援学校の方々の合唱を聴きました。綺麗なハーモニーに合わせて、平和への願いが映し出されていて、とても心に響きました。合唱の最後に、「私たちは平和をいつまでも守り続けます」と伝えられました。私もそのように平和を守り続けていきたいです。そのあと、原子爆弾が投下されたＶＲ映像を見ました。原子爆弾によって一瞬で町が炎に包まれ、平和だった町の変わり果てた姿を見て、とてもつらい気持ちになりました。次に、被爆者の梶矢さんのお話を聴きました。梶矢さんは、被爆された当時、六歳でした。幼い頃に被爆され、残酷なことがありながら、「二度と戦争を起こしたくない」という思いで私たちに話してくださいました。田中さんも梶矢さんも本当は、戦争当時のことを思い出したくないと思います。しかし、こうして戦争を二度と起こしてはならないという思いで話してくださいました。

お二人の話を聴いて、その思いを受け継ぎ、私もみなさんに伝えていきたいと思いました。そして、ピースメッセンジャーとして、この二日間で学んだことを活かし、自分にできることは何かを考え、行動に移していきたいと思いました。

平和への願いを受け継いで

城田中学校　代表者

私は城田中学校の代表として、八月五日から六日にかけて広島に行きました。普段はテレビなどでしか戦争のことが聴けなかったので、戦争の恐ろしさがより身近に感じられました。その中でも特に印象に残っているのは平和記念資料館と被爆者の梶矢 文昭さんのお話です。

平和記念資料館では、戦争当時の写真やイラストを見ました。入ってすぐのところにあった少女の写真がとても印象に残っています。その写真は遠くから見ていると微笑んでいるように見えましたが、近づくにつれ、その少女の顔は助けを求めているような顔に見えました。それから、原子爆弾が投下された瞬間の映像を見ました。一瞬にして町の建物が全て消えて焼け野原になっていました。この映像を見て原子爆弾は本当に恐ろしいものだと思いました。しばらく進んでいくと血まみれになった兵隊の服がありました。見ていて心が苦しかったです。さらにその奥に行くと被爆から7年後に発掘された遺骨の写真がありました。とても怖かったです。当たり前かのように町には人の骨が落ちていて、今では考えられないような風景でした。出口に着いたときに感じた、入館時には思いもよらなかった自分の気持ちの沈み具合は忘れられません。出口付近にいた他の人々も俯いていました。戦争当時の写真やイラストを見るだけでも恐ろしいのに、実際にその場所にいたらと考えるだけでも鳥肌が立ちます。

次は被爆者の梶矢 文昭さんによる話についてです。被爆された当時の梶矢 文昭さんは国民学校の一年生だったそうです。当時六歳だった時の話を覚えている時点で、戦争の恐ろしさが伝わってきました。原子爆弾が落とされた瞬間、梶矢さんは爆心地から二キロほど離れた場所にいたそうです。原爆が落とされた時はピカーン、ドーンと音がしたと同時に強い光を放ち一瞬にして焼け野原になったそうです。梶矢さんは原子爆弾が落とされた時、姉と玄関を雑巾で拭き掃除していました。梶矢さんはバケツの水を入れ替えに行っていたので助かりましたが、水を入れ替えに行っていない姉は、原子爆弾の熱線で亡くなりました。母は柱の下敷きになり熱線と同時に大量のガラスの破片を浴び、眼球にもガラスの破片が刺さりました。耳を塞ぎたくなるような話で、心が痛かったです。梶矢さん自身も思い返したくもない過去を話してくれたと思うと、私も平和のために後世の人に話を語り継いでいきたいと強く思いました。

今回の体験を通して戦争は二度とあってはならないと思いました。また平和とは戦争がなくなることだけではなく、いじめや不平等も世の中からなくなることだとわかりました。年々被爆者の数は減少しています。この経験を活かしピースメッセンジャーとしての役割を果たしていきたいです。